

主 題：憐れみの神
聖書箇所：創世記 3章

イエス・キリストの誕生を記念するクリスマス、どうしてイエス・キリストがこの世に来られたのか、どうしてイエス・キリストはこの世に来る必要があったのか、イエスご自身のおことばによれば「わたしは世をさばくために来たのではなく、世を救うために来たからです。」（ヨハネ12：47）と言われていいます。私たちがをさばくためではなく、私たちが救うためにイエス・キリストは来られたと教えています。人間の歴史を振り返ってみますと、人間の罪にも関わらず、神は常にあわれみを示してくださっています。私たちのような罪深い者に、救われる価値のない者に神は常にあわれみを示してくださっているのです。この創世記の3章には、皆さんよくご存じのように、人類の最初の罪が記されています。アダムとエバが神の前に罪を犯したときのことがここに記されています。こんな悲しい日であっても、こんな残念な日であっても、神はまだあわれみを示してくださっているのです。それが私たちの神です。それが私たちの創造主なる神です。

それで私たちはこの創世記のみことばを通して、私たちの神がどんなにすばらしい偉大なお方であるのかを見て行きます。

1. 誘惑 1－5節

まず、3：1－5に誘惑が出て来ます。「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。蛇は女に言った。「あなたがたは、園のどんな木からも食べてはならない、と神は、ほんとうに言われたのですか。」：2 女は蛇に言った。「私たちは、園にある木の実を食べてよいのです。：3 しかし、園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけなからだ。』と仰せになりました。」：4 そこで、蛇は女に言った。「あなたがたは決して死にません。：5 あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」

1) 誘惑をした者 1節

3：1に誘惑したものの、蛇が出て来ます。ヘブル語の原書では、最初に「さて、」に続いて「蛇」が出て来ます。蛇を最初にもってきたのはそれを強調したいからです。ある人はこの蛇はサタンだと言います。サタンがこのような姿で現われたのだと。よく見ると、このみことばが言うのは明らかに「蛇」です。私たちが目にするあの蛇です。その蛇がどういう獣であったか、「神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、蛇が一番狡猾であった。」と記されています。この「狡猾」ということばは悪い意味にも良い意味にも取れます。悪い意味で取っている神学者たちはこれは悪賢いと訳しています。しかし、イエスはマタイ10：16で「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい。」「賢くあれ」と言われました。良い意味です。神が造られた獣の中で、どういうわけかこの蛇は非常に賢かったのです。その蛇をサタンが使ったのです。この後、サタンということばは出て来ないのですが、エバへの誘惑を見て行くとこの誘惑はまさにサタンが行なう誘惑と非常に類似しています。サタンは実に人をだますのです。Ⅱコリント11：14には「しかし、驚くには及びません。サタンさえ光の御使いに変装するのです。」とあります。サタンは人をだますために天使のように変装することができるのです。また、イエスご自身もヨハネ8：44で「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立つてはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」とされています。ですから、この後エバへの誘惑を見ると嘘の連続です。そういうことから、間違いなくこの蛇という動物を用いてサタンが人をだまそうとするのです。

そして、もう一つ、サタンがこの蛇を用いたという根拠を見ましょう。蛇はエバとの会話の中でおもしろいことを言っています。3：5を見ると「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、」とありますが、これはサタン自身の願望です。イザヤ14章に出てきますが、神によって造られたサタン、天使たちの中で最も美しかった存在がなぜ罪を犯したのか、どんな罪を犯したのか、彼は被造物でありながら創造主になろうとしたのです。自分自身を神にしようとしたのです。イザヤ14：13－15「あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。：14 密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』：15 しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」「いと高き方のようになろう」と言っています。サタンの罪、サタン自身の特徴がここに出ています。蛇という動物を使ってサタンはエバを誘惑するのです。蛇を自ら

の道具としてサタンは用い、神はそれを許可されたのです。

2) 誘惑の方法 1 b - 5 節

サタンがしたことは、エバとアダムの二人に対して神のみことばと神への疑いをもたせようとするのです。サタンが働くときに、サタンが人々を誘惑するときには、必ずサタンは人に神に対する疑いをもたせるのです。神のおことばを信頼しないように仕向けて行くのです。そのことがここに出て来ます。簡単に、私たちはそのサタンの戦術を見て行きます。

(1) 関心を引く

エバはびっくりしたかもしれません。蛇が語りかけるからです。私たちは「蛇」と聞くとあのくねくねした気持ちの悪い蛇を連想しますが、そうではなかった、神が造られたものはすべて美しかったのです。その中でも利口であった蛇がエバに語りかけるのです。そうすると、エバは間違いなく関心を持ちました。私たちはどのようなものに関心をもつでしょう？気をつけないといけません。サタンはエバに話しかけることによって彼女の関心を引くのです。

(2) みことばへの疑いをいだかせる

「神は、ほんとうに言われたのですか。」と言っています。サタンは非常に巧妙にこのような誘惑を為します。というのは、みことばに対する信頼がぐらついたときにその人の信仰もぐらつくことをサタンは知っているからです。神が言われたことは必ずそうなると思っている人は、いろいろな問題があっても神のことばに戻って、その神のことばに信頼をおいて希望を得ます。今は分からないけれど神が約束されたから信じましょうと。そういう人の信仰はなかなかぐらつきません。でも、神はこう言っておられるけれど信頼していいのだろうか？と思いはじめると、その人の信仰はぐらつき出します。サタンは巧妙にエバに対して「神は、ほんとうに言われたのですか。」と問いかけるのです。彼女の答えは神が言われたこととは違いました。サタンはそのことを知っています。見事にそのように働くのです。エバに出来たこと、もし、自分に確信がなければアダムに聞けばよかったです。しかし、エバはそうしなかった、そして、神が言われていないことまでも神が言われたと話すのです。このようにサタンはみことばに疑いをもたせるのですが、言い換えると、サタンはみことばの力を知っているのです。もし、私たちがいろいろな誘惑に会うときに、私たちがみことばに立ち返って神がこう言われているからと、みことばに立って対処して行くなればサタンは太刀打ちできないのです。私たちがみことばではなく、私たちが持っている知恵や経験などに信頼を置くなら、サタンにとってははしめたものです。私たちを負かすことなど容易いことです。

(3) 神への不信感をいだかせる

4 節には「あなたがたは決して死にません。」と言っています。エバは『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけなからだ。』と言っています。神が言ったことと違うとサタンは知っているのです。そこで、サタンは「死なない」と言います。このことばに何があるのでしょうか？つまり、エバがみことばに立って答えなかったのでサタンは「神の言われていることは信頼できない」というのです。サタンは今度は神への不信感をもたせようとするのです。サタンは神の真実性を否定するのです。そのことによって神が言われたことは真実でない、間違っている、神は嘘つきだと、そのように誘惑するのです。このようなサタンの声を聞いたとき、エバは「本当かな？」と思えます。エバの中ではこのサタンが言っていることは「本当かな？」、それなら、神が言われていることは信頼性がない、神は間違ったことも言われる、サタンがそう言っていると、神への不信感が大きくなって行くのです。

(4) 神の善を否定する

同時に、サタンは神の善を否定しようとします。5 節「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け、あなたがたが神のようになり、善悪を知るようになることを神は知っているのです。」と。サタンがすること、神は利己的な方だ、自分のことしか考えていない、あなたのことなど考えていない、なぜなら、あなたがこの木の実を食べると神は困ることになる、あなたが神のようになるなら、神は利己的な方だからあなたが自分と同じようにならば困る、だから、「食べるな」という命令を与えたと、そのように言うのです。そうすると、神は自分のことばかり考えている、自分の地位を守るためにこれを食べるなど私に言った…と、その心の中には聖書が教えている神と違う神を持ち始めるのです。嘘をつく神、私たちを愛していつも最善を為してくださる方ではない、私たちなど重要ではないと。このようにサタンの誘惑は見事です。ですから、私たちの信仰がぐらついているときはみことばに立っていません。しかも、神を疑っていることが多いです。なぜ神はこのようなことを私に為されるのでしょうか？なぜ神は私の祈りを聞いてくれないのでしょうか？なぜ神は私にばかりこんなことを為されるのでしょうか？と、そのようにして、私たちは見事に事実でないもの、偽りにだまされてしまうのです。

(5) 神は主権者ではないとする

もう一つ付け加えておきたいことは、このサタンとエバとの会話において注目していただきたいことがあります。サタンは3：1で「神は」と言っています。また、3節ではエバが「神は」と言っています。そして、5節「神のようになり」とサタンが言っています。1節と5節はサタンが「神」と言い、3節ではエバが「神」と言っています。2章に戻って、2：4には「これは天と地が創造されたときの経緯である。神である主が地と天を造られたとき」とここでは「神である主」と言っています。それは、2：5, 7, 9, 18, 19, 21, 22にも出て来ます。3章になると、3：1「さて、神である主が造られたあらゆる野の獣のうちで、…」とここでも「神である主」とあります。3：8, 9, 13, 14, 21, 22, 23にも「神である主」とあります。なぜ、このように強調したのかと言いますと、この「主」ということばは主権者という意味です。「神である主」というのはヘブル語では「ヤーウェー・エロヒム」と言いました。今挙げた聖書の箇所は皆そのように書いてあります。「エロヒム」は一般的な神の名ですが、それに、この「ヤーウェー」、「主」「主権者」というのを付けているのです。しかし、見事にサタンはその「ヤーウェー」を除いているのです。つまり、サタンは神が存在していることを知っています。エロヒムがいることを知っているのです。新約聖書を見ると「あなたは、神はおひとりだと信じています。りっぱなことです。ですが、悪霊どももそう信じて、身震いしています。」(ヤコブ2：19)とあります。でも、サタンにとってこのエロヒムはヤーウェーではないのです。主権者ではないのです。私たちの中でも多くの人がイエス・キリストを信じている、創造主なる神を信じているけれど、自分の主とはしていないということはおかしなことです。この方は常に神である主、主権者なのです。私たちの人生をすべて司っておられる方であり、私たちが従うべきお方です。それなのにその方が私の主ではないというのは、その信仰は絶対におかしいのです。サタンは見事にこの「ヤーウェー」を除くのです。残念ながら、エバもここで使っているのは「エロヒム」です。あなたの知恵もこのサタンには適いません。あなたの知恵でこのサタンに勝利しようなどと考えること自体が問題です。サタンは非常に巧妙に誘惑の手を伸ばして行ったのです。サタンはエバのところにいかにも彼女を心配しているかのように近寄って声をかけました。しかしサタンは、創造主との交わりを楽しむというその神の祝福を十分にいただいていたアダムとエバが、そのすべてを失うことを望んだのです。そして、永遠のいのちの代わりに永遠の滅びを、神との交わりの代わりに滅びの神であるサタンとの交わりを、神の祝福の代わりにサタンののろいを共有することを彼は望み、そのように誘惑したのです。神は嘘つきだと言って…。サタンの狙いはあなたを神と敵対させることです。そして、見事にエバはその誘惑に負けて行くのです。

2. 敗北 6節

6節に敗北が出て来ます。「そこで女が見ると、その木は、まことに食べるのに良く、目に慕わしく、賢くするというその木はいかにも好ましかった。それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」と、彼女は誘惑に負けて行きます。ここでもサタンの戦術を見ます。私たち人間がどのようにして誘惑に負けて行くのか、このエバの敗北を見ると、私たちは同様に自分自身の誘惑に負ける共通の傾向というものを見ることができます。三つあります。(1) 肉の欲への誘惑：6節に「その木は、まことに食べるのに良く」とあります。これはいいなあ、これがほしいなあと…。(2) 願望：「目に慕わしく」とあります。肉の欲に誘惑されたときに、だんだんそれが自分の心の中で願望、感情に働きかけます。どうしてもこれが欲しいと非常に感情的になって行きます。(3) 知的誘惑：「賢くするというその木はいかにも好ましかった」と今度は知的な部分に対して誘惑されます。なぜこれが自分にとって必要なか、なぜなくてはならないものなのかといろいろ考え始めます。そして、それを手に入れようとしめます。しかも、「賢くするというその木は」とあり、恐らく、最初は「ほしいなあ」、だんだんそれが自分にとってすばらしいもの、なくてはならないものだと思いはじめ、そして、これを食べるなら賢くなる、自分の理想に近づく、そうして罪を犯すことになるのです。まさに、このことはIヨハネ2：16でヨハネが言っていることです。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たものだからです。」。初めにそれを欲しいと思い、その誘惑がだんだん大きくなると、どうしてもそれを手に入れなければいけない、そして、これを手に入れさえすれば自分は満足できる、自慢できると、それで罪を犯して行くのです。今話したことを皆さんご自分の生活に当てはめてみてください。そういう形で私たちは罪を犯します。気を付けなければ私たちは同じように誘惑に負けて行きます。ヤコブはヤコブの手紙4：7で「ですから、神に従いなさい。そして、悪魔に立ち向かいなさい。そうすれば、悪魔はあなたがたから逃げ去ります。」と言っています。私たちに誘惑がやって来るとき私たちが考えなければいけないことは、これが本当に神の前に正しいのかどうかです。私たちがいろいろ見ていいなあと思うものはたくさんあります。しかし、それらがすべて私たちにとって益になるわけではありません。私たちは神に対して、約束されたように必要をくださる神が必要なものを与えてくださいと言うことです。感情的になって見境がつかなくなってしまう、そういう状態ではいけないのです。エバの間違ひは、ここでみことばを見るかぎり、一度も夫に相談していません、神にも相談

していません。彼女は自分の判断に頼って決断したのです。見事にこの誘惑に敗北したのです。

エバは誘惑を受けました。アダムは受けていません。アダムはみことばが教えるようにエバから与えられたのです。3：7 b「…それで女はその実を取って食べ、いっしょにいた夫にも与えたので、夫も食べた。」3：17を見ると「また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に聞き従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。」とあります。アダムは自分の意志で、神の声に聞き従うよりも、神の命令に従うよりも、妻の声に従って罪を犯したのです。そして、この夫婦において彼が責任者です。悲しいことに、彼の罪によって人類に罪が入り、私たちは罪をもって生まれて来る存在となったのです。

3. 罪の結果 7-19節、22-24節

1) 人類への影響

この罪によって罪のない時代は終わりました。罪が入り込んだのです。3：7を見ると「このようにして、ふたりの目は開かれ、それで彼らは自分たちが裸であることを知った。そこで、彼らは、いちじくの葉をつり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。」とあります。サタンは5節で「あなたがたがそれを食べるその時、あなたがたの目が開け…」と言いました。確かに目が開かれました。それは彼らにとって良かったのでしょうか？決してそうではなかった、目が開かれることによって (a) **恥と罪悪感**：人への見方が変わりました。「彼らは自分たちが裸であることを知った。」とあります。アダムとエバがお互いを見たとき見方が変わりました。罪を犯す前は神がご覧になるように見ていました。ところが、罪が入り込んだことによって人間が見るように見るようになったのです。(b) **神から隠れる**：8-13節「そよ風の吹くころ、彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。それで人とその妻は、神である主の御顔を避けて園の木の間に身を隠した。：9 神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」：10 彼は答えた。「私は園で、あなたの声を聞きました。それで私は裸なので、恐れて、隠れました。」：11 すると、仰せになった。「あなたが裸であることを、だれがあなたに教えたのか。あなたは、食べてはならない、と命じておいた木から食べたのか。」：12 人は言った。「あなたが私のそばに置かれたこの女が、あの木から取って私にくれたので、私は食べたのです。」：13 そこで、神である主は女に仰せられた。「あなたは、いったいなんということをしたのか。」女は答えた。「蛇が私を感わしたのです。それで私は食べたのです。」、神の顕現、つまり、神は霊的な存在ですが、旧約聖書においては人間の形をとって現われることがありました。それを顕現と言いますが、そのような形で神はここにも現われたのです。そして、神は8節を見ると、これまでと同じように交わりをもととされますが、人間は神から隠れるのです。人類は罪を犯すことによって、人が見るように人を見、神から隠れる者になり、そして、(c) **罪の転嫁**：10節から記されているように、自分の罪を悔い改める代わりに、その罪の責任転嫁をして人を責めるようになったのです。

2) 蛇への影響

14節「神である主は蛇に仰せられた。「おまえが、こんな事をしたので、おまえは、あらゆる家畜、あらゆる野の獣よりもろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。」、最初に話したように、非常に美しい存在であった蛇は「のろわれる。おまえは、一生、腹ばいで歩き、ちりを食べなければならない。」となったのです。美しかった蛇が忌まわしいものへと落とされたのです。「腹ばいで歩き、ちりを食べ」というのは、蛇の食べ物のことではありません。美しく狡猾であったものがこのように屈辱を受けるものとなったことを表わすのです。卑しめられる存在となったのです。レビ記11：42に「地に群生するもののうち、腹ではうもの、また四つ足で歩くもの、あるいは多くの足のあるもの、これらのどれもあなたがたは食べてはならない。それらは忌むべきものである。」と書かれています。これは蛇への神のさばきです。ですから、私たちが蛇を見る度に覚えるべきことは神のさばきです。虹を見るとき、私たちは神はもう洪水によって人類を滅ぼさないという約束を思い出すように、蛇を見るとき、狡猾であった蛇をサタンが使ってアダムとエバが罪を犯して行ったこと、その結果、蛇はのろいを受けた、神のさばきがあったことを私たちはしっかり覚えておくことです。

3) 女への影響

16節「女にはこう仰せられた。「わたしは、あなたのみごもりの苦しみを大いに増す。あなたは、苦しんで子を産まなければならない。しかも、あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」、ここで神が言われたことは、これまで、1：28、2：18、21-25で夫婦に与えられた神からの祝福がどのようなものか記されています。それは、子どもを生むということ、そして、夫婦が一つになるということです。2：24「それゆえ、男はその父母を離れ、妻と結び合い、ふたりは一体となるのである。」とそのような特別な親しい関係を神は約束されたのです。その神の祝福がここですべて壊されてしまうのです。ですから、出産について「みごもりの苦しみを大いに増す」と言われ、「あなたは夫を恋い慕うが、彼は、あなたを支配することになる。」と、神が定められた特別な夫婦の関係の中に問題が生じるということです。妻が夫を支配しようとする、夫は妻を支配しようとする、そうしてお互いの間に様々な争いが生じ

るということです。残念ながら、女性にはこのようなことが起こると神が言われたのです。

4) 男への影響

17-19節には「また、アダムに仰せられた。「あなたが、妻の声に従い、食べてはならないとわたしが命じておいた木から食べたので、土地は、あなたのゆえにのろわれてしまった。あなたは、一生、苦しんで食を得なければならない。:18 土地は、あなたのために、いばらとあざみを生えさせ、あなたは、野の草を食べなければならない。:19 あなたは、顔に汗を流して糧を得、ついに、あなたは土に帰る。あなたはそこから取られたのだから。あなたはちりだから、ちりに帰らなければならない。」とあります。先ほど見たようにアダムは神のおことばよりも妻の声に従って罪を犯したのです。その結果、神は土地をのろったと言います。それゆえに、これまではその産物を喜んで食していた彼らが、苦しんで食べ物を得なければならなくなったのです。そして、19節には人間に「死」がもたらされたと言われています。ローマ6:23に「罪から来る報酬は死です。」とある通りです。

5) 二人への影響

22-24節を見ると、神はこの二人に対して彼らをエデンから追放されるのです。「神である主は仰せられた。「見よ。人はわれわれのひとりようになり、善悪を知るようになった。今、彼が、手を伸ばし、いのちの木からも取って食べ、永遠に生きないように。」:23 そこで神である主は、人をエデンの園から追い出されたので、人は自分がそこから取り出された土を耕すようになった。:24 こうして、神は人を追放して、いのちの木への道を守るために、エデンの園の東に、ケルビムと輪を描いて回る炎の剣を置かれた。」。

このような結果が彼らの罪には伴ったのですが、最初に話したように、神に罪を犯したというそんな悲しい日であっても、神は彼らに対してあわれみを示しておられるのです。15節を見てください。「わたしは、おまえと女との間に、また、おまえの子孫と女の子孫との間に、敵意を置く。彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく。」とあります。このみことばを見る前に、神は罪人のために何をしようとしたのかを見ましょう。(1) 招いておられる: 8節に「彼らは園を歩き回られる神である主の声を聞いた。」とあります。彼らの名前を呼んでおられたのかもしれませんが。というのは9節でも「神である主は、人に呼びかけ、彼に仰せられた。「あなたは、どこにいるのか。」とあるからです。彼らを捜しておられる神の姿が描けます。神は捜さなければ彼らがどこにいるのか分からなかったのでしょうか?とんでもない、分かっています。これが神のあわれみなのです。人間が罪を犯したことを神はご存じです。それでも神は彼らをすぐに責めるのではなくて、彼らに対して悔い改めのチャンス、救いの機会を与えようとするのです。ですから、神は彼らのことを呼んでおられるのです。みことばを見ると、神は繰り返し繰り返し罪人を招いておられます。イザヤ55:7「悪者はおのれの道を捨て、不法者はおのれのはかりごとを捨て去れ。主に帰れ。そうすれば、主はあわれんでくださる。私たちの神に帰れ。豊かに赦してくださいから。」、神のもとに帰りなさい、赦してくれるからと。罪を犯したダビデが言います。「ヒソブをもって私の罪を除いてきよめてください。そうすれば、私はきよくなりましょう。私を洗ってください。そうすれば、私は雪よりも白くなりましょう。」(詩篇51:7)。新約聖書の中でもイエスは言われました。マタイの福音書11:28「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」と、このように神はいつも罪人を招いておられるのです。罪人に対して神は扉を閉じておられるのではありません。神は罪を犯した者を赦そうとしてくださるのです。だから、招いておられるのです。神はあなたがどんな罪を犯したのかご存じです。それでいてなお、あなたを愛してあなたをあわれんであなたに救いを与えようとしておられるのです。そして、(2) 救いを備えてくださった: 15節には「敵意を置く」とあります。神は敵対関係を教えています。「おまえの子孫」と「女の子孫」とありますが、女から出てくる者と蛇、サタンに関連した者と、その間に敵対関係が生まれるということを見て取れます。しかし、よく考えなければいけないことは罪を犯した段階でアダムとエバはサタンと敵対関係にあったのではなく、サタンと友好関係にあったのです。神と敵対関係にあったのです。罪人は皆そうです、神に逆らっている者だからです。(3) 失敗が神によって修復される: 罪を犯したときには神に敵対する者でしたが、続いて15節を見ると、アダムもエバもその間違った失敗の関係が神によって修復されるということに気付くのです。つまり、神との敵対関係が何らかの形で修復されて、今度は敵であるサタンと女の子孫との間が敵対関係になるというのです。この時点ではそのようなことが起こらなかった、でも、彼らは後にそのことを教えられるのです。ある人は、蛇の子孫は父であるサタンに仕えるすべてのものを指していると言います。女の子孫とは主なるイエスに仕えるすべてのものたちです。だから、そこに敵対関係が起こるのです。神と敵対関係にあった人間、しかし、神は何かをなさることによってその関係を改善してくださるのです。それがこの15節に出ています。「彼は、おまえの頭を踏み碎き、おまえは、彼のかかとかみつく。」、「かかとかみつく」とは非常な激痛のことです。私たちはイエス・キリストの十字架を見たとき、サタンが為し得たわざを見ます。救い主を苦しめるのです。ところが、救い主は「おまえの頭を踏み碎き」ます。これは蛇の頭ではなく、蛇を用いたサタンの

頭で、サタンに致命傷を負わせる、サタンに死をもたらすというのです。サタンの力を完全に打ち破ると言うのです。ローマ16：20に「**平和の神は、すみやかに、あなたがたの足でサタンを踏み砕いてくださいます。どうか、私たちの主イエスの恵みが、あなたがたとともにありますように。**」とあります。ですから、ここで神が与えた約束は、女の子孫が人と神との敵対関係にある状態を改善して、失敗を帳消しにしてください、そういったことが神によって為されるというのです。もちろん、彼らはイエス・キリストのことを知っていたのではありません。そこまで示されていませんでした。しかし、彼らは罪によって陥ってしまった神との悲しい関係を、神はもう一度回復してくださるということが分かったのです。

そして、20節「**さて、人は、その妻の名をエバと呼んだ。それは、彼女がすべて生きているものの母であったからである。**」、ここにアダムの信仰を見ることができます。彼は自分の妻の名を「エバ」と呼んだと言います。確かに、2章を見ると、23節「**これこそ、今や、私の骨からの骨、私の肉からの肉。これを女と名づけよう。これは男から取られたのだから。**」とありますが、これは名前を呼んだのではありません。この女性は自分のあばらから取られたということを使ったにすぎません。3：20は、初めてここでアダムは彼女に「エバ」と名前を付けたのです。「すべての生きているものの母」という意味です。ですから、アダムはここで3：15の約束を思ったのでしょうか。罪を犯したことによって私たちは必ず死ぬものとなった、しかし、このエバから生まれて来るものがいのちをもたらすことができると…。大きな失敗を犯してしまったゆえの関係を元通りにしてください、そういう方がお生まれになる、そして、その方はエバから生まれて来ると。つまり、この20節のみことばは15節で約束されたことを信じていたアダム自身の告白なのです。神は必ずこの罪の問題に対して、神との敵対関係を変えてくださって、今度は誘惑した蛇と敵対関係になる、つまり、神と和解するのです。そのような関係をもたらしてくださいと信じて彼女のことを「エバ」と名付けるのです。そして、エバ自身も4：1を見ると「**人は、その妻エバを知った。彼女はみごもってカインを産み、「私は、主によってひとりの男子を得た。」**」と言った。」と、彼女自身もそのことが分かっていたのです。少なくとも、神が約束されたように彼女から子どもたちが生まれて来ること、そして、その中に神との関係を回復してくださる方がいること、そのことが分かっていたのです。ですから、「**私は、主によってひとりの男子を得た。**」と言っています。3：15のみことばをエバ自身も受け入れていたことが分かります。

そして、3：21に「**神である主は、アダムとその妻のために、皮の衣を作り、彼らに着せてくださった。**」とあります。アダムとエバが神が示されたことによってこの神を受け入れました。彼らが罪を犯したときに最初に彼らがしたことは「**そこで、彼らは、いちじくの葉をつづり合わせて、自分たちの腰のおおいを作った。**」でした。でも、ここで神が彼らにふさわしい衣を与えたのです。神がその罪を覆うためにふさわしいことを為してくださいました。そして、彼らはそこから出て行くのです。

今日、私たちは大急ぎでこの創世記3章を見て来ました。神にとって最も悲しむべき出来事が起こった日です。愛する人間が神に逆らったのですから。しかし、その中でも神は彼らのためにこのようなあわれみを示して救いの道を備えてくださったのです。これは新約聖書の中を通して私たちが常に見続けていることです。神は私たち罪人をあわれんでくださり、神の前に来る人々を神は救ってくださいと。神が今朝またあなたに望んでおられることは何でしょう？それは、もし、あなたがまだこの神の前に罪赦されていなければ、敵対関係の状態にあるなら、神はあなたを赦してください、救いを求めて神の前に出て来ることです。神は罪を赦してください、そのためにイエス・キリストは来たのです。キリストの誕生というのは、神があなたをあわれんでいてくださる、あなたを愛して下さっている、そして、あなたに必要な罪の赦しを与えようとして下さっていることの証です。どうぞ、神に背を向け続けることを止めて、あわれみの神のところにあわれみを求めて出て来てください。主は救いを与えてくださいます。